

# 翁

(能)

シテ 宝生 和英

面箱 山田 讓二

三番叟 炭 光太郎

千歳 木谷 哲也

大鼓 亀井 洋佑

小鼓 住駒 充彦

小鼓 住駒 幸英

小鼓 河原 清

笛 室石 和夫

狂言後見 能村 祐丞  
荒井 亮吉

後見 佐野 由於  
佐野 玄宜

地謡

大澤 永靖 島村 明宏  
山崎 健 渡邊 荀之助  
田屋 邦夫 藪 俊彦  
川島 英治 高橋 憲正

休憩 二十分

(狂言)

# 末広かり

果報者 能村 祐丞

太郎冠者 中尾 史生  
すっぱ 鍋島 憲

後見 荒井 亮吉

(能)

子方 渡邊 さくら

シテ 佐野 弘宜

# 船弁慶

ワキ 平木 豊男

ワキツレ 北島 公之

大鼓 飯嶋 六之佐

小鼓 住駒 俊介

太鼓 麦谷 暁夫

笛 檜垣 勇

間 炭 哲男

後見 広島 克栄  
高橋 憲正

地謡

酒井 章 藪 克徳  
長野 裕 高橋 右任  
笠間 啓 渡邊 茂人  
中村 清 松本 博

能 翁 (おきな)

老体の神による祝福の歌舞で、古くは〈父尉〉を省略せず、〈式三番〉と呼びました。神聖な晴れの催しや正月に演じられます。幕が上がって、面箱持ち(狂言方)・翁(シテ方)・千歳(同)・三番叟(狂言方)、そして雛子方ほかの諸役が登場し、翁の前で面が箱から出されるのを待って着座します。笛や小鼓三丁の雛子とともに、翁は「とうとうどうたらり」と千代の幸せを祈る祝言を謡います。次に千歳が「鳴るは滝の水」を謡い舞って、千年の栄えをことほぎます。この間に翁は白式尉の面を掛け、神となって三番叟に向き合い、そばに参ろうと上機嫌です。やがて正面を向いた翁は、袖を大きく広げて、天下泰平国土安穩を祈祷し、莊重な翁舞を舞います。面を外した翁(と千歳)が退場したあと、雛子に大鼓が加わって、喜びを逃すまいという三番叟による揉ノ段、黒式尉の面を掛けた三番叟と面箱持ちによる問答の後、鈴を受け取った三番叟が鈴ノ段を舞って終わります。

狂言 末広かり (すえひろがり)

末広がりとは扇のこと。それを古傘のことと信じこませて、都のすっぱが田舎者の太郎冠者に高値で売り付けます。主人のつけた条件、地紙・骨・要、それに戯れ柄(絵)も備え、なるほど末広りの形にもなります。喜んで持ち帰った冠者は、もちろん主人に叱られます。そんなときのために、主人の機嫌を直す雛子物を、すっぱが伝授してくれました。主人の体がピクピクと浮かれ始めるのに注目。祝言性豊かな脇狂言の代表作です。

能 船弁慶 (ふなべんけい)

兄頼朝との不和により都落ちする判官(義経)一行十余人は淀川を船で下り大物の浦へ出ます。ひとまず弁慶(ワキ)馴染みの宿に休み、弁慶が義経(子方)の許しを得て愛妾静(前シテ)に帰洛を促します。これから先の難路を思えば女人の同行は無理、人口も憚られての判断です。義経自身からも別れの言葉があり、静はようやく納得すると共に、弁慶の策略、義経の心変わりを疑った我が身を恥じ、再会を願って門出の祝宴に白拍子を舞います。一行は船出し静は涙にむせびます(中入)。未練に発ちしぶる義経を励まして、弁慶は船頭に船を出させます。六甲沖で風が変わり、雲行きも怪しく、波が騒ぎ始めます。怪士が憑いたと縁起でもないことをいう者(ワキツレ)もあり、船中が動揺するうちに海上には平家一門の幽霊が浮かび出て、平知盛(後シテ)を先頭に嵐と共に義経に襲いかかります。果敢に太刀を構える義経をかばい、弁慶が必死に祈り防いで悪霊を退散させます。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十年二月四日(日) 午後一時始

(能) 養老 (狂言) 節分 (能) 籠太鼓